

『金融研究』(第18巻第4号)所収論文の紹介(注1)

日本銀行金融研究所では、その研究成果を広く外部に公表することを狙いとして、『金融研究』(注2)を発行している。以下は、第18巻第4号(平成11年9月発行)所収論文の要約を紹介したものである。

江戸時代の貨幣鑄造機関(金座、銀座、銭座)の組織と役割

— 金座を中心として

大貫摩里

徳川幕府の政治体制は幕府と諸藩の重層的な権力によって、農・工・商階級を支配する、いわゆる幕藩体制であった。こうした政治的な支配体制を強固なものにするために、徳川幕府は貨幣制度の確立を図り、経済的にも支配を確かなものにしようとしたと考えられる。

徳川幕府が確立した貨幣制度は金貨、銀貨、銭貨からなる三貨制度と呼ばれるものであるが、幕府自身が直接貨幣を鑄造、発行したわけではなかった。幕府は金座、銀座、銭座とよばれる貨幣鑄造機関を設立し、それぞれの座にそれぞれの貨幣を鑄造させたのである。鑄造された貨幣はすべて幕府へ上納させ、幕府は諸費用の支払いや改鑄によって必要となる新旧貨幣の引替え等を通じて、これら貨幣の発行を図った。

金貨の鑄造を一手に引き受けた金座は、ほかの座と比べて幕府から非常に厳しい管理、統制を受けていた。具体的には、貨幣鑄造工程にお

ける複数の作業による相互監視体制、職員の採用時における誓約書の提出の義務づけ、高位役職へ就任できる家柄を限定する、などである。徳川幕府における金の位置づけの高さは、こうした金座の管理体制からも窺うことができる。

江戸時代における改鑄の歴史とその評価

大塚英樹

江戸時代には、金貨や銀貨の重量や金・銀の含有量を変更する貨幣の「改鑄」が数次に亘って行われ、金座などの貨幣鑄造機関や、両替商など商人を主体とする機関が、政府部門と民間部門との仲立ちとなって新旧貨幣の交換業務に携わった。

貨幣改鑄は基本的には徳川政権の政治体制であった幕藩体制を経済的に支える米の価格を調整することを目的としたものであると考えられるが、各改鑄時における背景については、貨幣鑄造益に着目した幕府の財政補填、マクロ経済実態を眺めた貨幣数量の調整、金銀相場の内外格差の是正など、さまざまな理由を挙げるこ

(注1) 本稿の内容は、日本銀行ホームページ(<http://www.boj.or.jp/>)「論文」コーナーにも掲載されています。

(注2) 『金融研究』所収論文の内容や意見は執筆者個人に属し、日本銀行あるいは金融研究所の公式見解を示すものではない。なお、『金融研究』第18巻第4号(定価1,050円)は、ときわ総合サービス(株)(本『日本銀行調査月報』刊行物一覧を参照)より販売。

ができる。また、こうした改鑄の歴史は、ある意味で徳川政権が自らの貨幣制度を確立していくプロセスとみることもできる。そうした中で、注目すべきは、徳川政権において貨幣体系の中心に据えられた金貨が、一両という共通した額面価値を付与されていたにもかかわらず、改鑄によって品位が変更され、その実質価値が異なった場合には、「増歩」と呼ばれるプレミアムを付加して旧貨幣と交換された点であろう。つまり、江戸期の金貨は、形式的には一定の額面をもった計数貨幣であったが、少なくとも文政期までは含まれる金の純分量によって価値が変動するという意味で、秤量貨幣としての性格をもった貨幣であったわけである。金貨が純分量に依存せず額面価値で通用し、金貨を中心としたわが国独自の貨幣制度が確立するのは天保期になってからのことである。

江戸期三貨制度の萌芽

― 中世から近世への貨幣経済の連続性

西川裕一

わが国独自の貨幣制度といわれる江戸期三貨制度は、中世における銭貨（渡来銭）を中心と

した貨幣経済に、貴金属として高い素材価値を有する金や銀を加えて、それぞれの交換価値を定め、貨幣としての体系を整えた制度である。

この三貨制度は、一朝一夕に形作られたものではなく、古代における皇朝銭の鑄造と途絶、中世における渡来銭を中心とした銭貨経済の発達、地金としての金や銀の使用面における役割の変化、中国を中心とする東アジア経済圏における海外交易の状況、時々の為政者による国家支配への政治的目論見といった諸要因が複雑に影響し合い、長い醸成期間を経たうえで生まれたといえる。

中世における銭貨をベースとした貨幣経済に、国際決済手段として用いられていた銀は秤量貨幣として導入され、一方、金については、形状、品位、および量目といった規格が統一され、額面が付されるなど、貨幣としての形態を良く整えたものとして制度化された。この金貨を価値基準として貨幣制度の中心に据えたところにわが国独自の特徴を見出すことができ、徳川幕府ができるだけ海外の影響を受けないわが国独自の安定した貨幣制度を構築しようとした姿が窺える。